

# 日系ブラジル人青年のデカセギ経験 —帰国者の生活史分析から—

児島 明\*

## A Study of Migration of Japanese Brazilian Young People

KOJIMA Akira

キーワード：ブラジル人青年，デカセギ，移行，文化，アイデンティティ

Key Words : Brazilian young people, migration, transition, culture, identity

### I. 課題の設定

1990年の改正入管法の施行からすでに20年が経過した現在，日系ブラジル人のデカセギに関しての調査・研究にはかなりの蓄積がある。比較的新しいところでは，労働市場分析のまとまった成果として大久保（2005）や丹野（2007）があり，地域社会における生活や意識に力点を置いたものとして池上編（2001）や小内・酒井編（2001）などを挙げるができる。両者の論理的な接合を試みているのが梶田・丹野・樋口（2005）であり，ここで提示される「市場と地域社会の相克」という視点は，日系ブラジル人のデカセギをめぐる構造的な矛盾を鋭く突いたものとして重要である。他方，デカセギがしばしば家族を伴う移動であることから，教育分野においても盛んに研究が行われてきた。まとまった成果としては，主に日本の学校との関連で教育課題を考察した児島（2006）や森田（2007），ブラジル人学校に通う子どもたちに注目した拝野（2010），子どものアイデンティティ形成について論じた関口（2003）などを挙げるができる。また小内編（2009a, 2009b, 2009c）は，「労働と生活」「教育と保育」「ブラジルにおけるデカセギの影響」の3つの観点から日系ブラジル人の移動と定住の諸相を実証的に解明しようとしており，ブラジルでの現地調査もふまえてデカセギが日伯両国の地域社会に及ぼす影響を検討した貴重な成果といえる。

では，このようにさまざまな分野で日系ブラジル人のデカセギをめぐる諸問題について研究が進められるなかで，デカセギを生きる主体はどのようなものとして想定されてきたのだろうか。ここでは，主な想定と考えられるものを3つ挙げておこう。第一は「労働者」という想定である。デカセギ現象を説明する枠組みには，出身地と移住先の経済的格差を背景に個人が行なう合理的選択として移住を描くプッシュプル論や出身地と移住先にまたがる社会的ネットワークに着目する移住システム論など，さまざまなアプローチが存在するが，いずれもデカセギの主体を経済的動機から説明しようとする点では共通している。第二は「住民」という想定である。地域社会における生活や意識に関する関心は，「住民」であることをめぐって生じる摩擦や対立を媒介として立ち上がってきたものと言ってよい。第三に「親」という想定が考えられる。子どもの教育をめぐる諸課題が検討される際には，この想定が持ち出されることになる。

---

\*鳥取大学地域学部地域教育学科

課題に応じてこれらの想定の内いずれかを採用することで、日系ブラジル人のデカセギ現象をさまざまな角度から検討することが可能になってきたわけであるが、それによって見過ごされてきた現実があることにも留意が必要であろう。上述の3つの想定に共通するのは、それらがすでに成人した存在を前提としていることである。しかしながら、グローバリゼーションにともなう社会の構造的変化の影響を受けて青年期から成人期への移行の遅延や不明確化が指摘される今日、人の移動に伴って生じる現象について考察するうえで、そのような移行の途上でデカセギを経験し、自らの人生を模索する若者の存在を無視するわけにはいかないだろう。乾彰夫は、U.ベックの「個人化(individualization)」をめぐる理論を整理しながら、個人化とグローバル化が平行して進行する現代社会を生きる人びとは複数の意味世界のなかで比較、対話、交渉、妥協を繰り返しながら自らの人生経歴を紡いでいくことを余儀なくされると述べているが(乾2010, pp.64-71)、デカセギという越境行為により不連続な複数の世界を生きる日系ブラジル人青年の移行過程は、こうした状況についての1つの象徴的な事例と位置づけることができる。

個人は生活のそれぞれの側面ごとに、複数の意味世界と断片的に接触しながら、モデルのない中で個人の生活を調整・管理することが求められる。したがって個人化のもとで自分固有の人生を生きるということは、つねに自己のおこなった行為や過去を振り返りながら意味づけし直すことを通して自分の人生経路をコントロールすることなのである。(乾2010, p.71)

では、日系ブラジル人青年が「自分固有の人生」を模索するうえで、日本へのデカセギはかれらに対してどのような意味世界との接触をもたらすのか。そして、そのような接触を通じて自らの行為や過去をどのように意味づけし直し、「自分固有の人生経路」を築いていこうとするのか。また、これらの問いに先立って、かれらが日本へのデカセギに向かう動機についても明らかにしておく必要があるだろう。

本稿は、日本へのデカセギを経験した後にブラジルへ帰国した14名の日系ブラジル人青年への聴き取り調査をもとに、デカセギという現象を日系ブラジル人青年の移行過程に位置づけることにより、これまで十分には検討されてこなかったデカセギの生きられ方の諸相を明らかにしようとするものである。

## II. 調査の対象と方法

本稿のもとになっているのは、2009年12月16日から30日にかけて、滞日経験があり現在はブラジルに在住する27名(年齢は17歳~38歳、男性が16名で女性が11名)に対して実施したインタビュー調査の結果である。この調査は、ブラジルと日本を行き来するブラジル人青年の進路形成について、渡日や帰国の経緯、家族生活、学校生活、職業生活、余暇の過ごし方、将来展望など、多様な側面から理解することを目的としたもので、インタビューは通訳担当のブラジル人男性(日系3世)の協力のもとで行なわれた(27名中10名については日本語のみでのインタビューが可能であった)。対象の選定については、基本的には通訳担当の男性の出身地域(サンパウロ州トゥッパン)を中心に、知人を紹介してもらいながら機縁法的に増やしていったが、報告者が日本で知り合った人びともいる。

インタビューは、それぞれの地域の日系文化協会や日本語学校で部屋を借りて行なうことが多かったが、対象者の都合に応じて自宅やショッピングモールなどでも行なった。所要時間は1人あ

たりおよそ1時間半～2時間であった。インタビューの進め方としては、上記の諸側面に関する基本的な質問項目を準備したうえで、実際のインタビューにおいては質問の順番等にはとくにこだわらず、各項目についてできるだけ自由に語ってもらう半構造化面接の方法をとった。聴き取った内容は了承を得たうえですべてICレコーダーに録音し、後に文字に起こした。

さて、本稿では、これらの27名のうち自らの意志により日本へのデカセギを選択した14名の日系ブラジル人青年（年齢は19歳～36歳、男性が9名で女性が5名）を考察の対象とする（残りの13名中12名は親のデカセギに同行して渡日した者である。また、1名は自らの意志による渡日ではあるが、非日系であることに加えて渡日前から既婚者であったため、他の対象者との条件の違いを考慮して今回の考察からは除外した）。14名のうち6名は日伯間の往復が複数回にわたっており、なかには、最初は親のデカセギに同行するかたちで渡日を経験し、後に自らの意志でデカセギを選択したというケースもある。また、帰国時に中等教育課程修了資格を取得して再渡日といったケースも存在する。したがってデカセギを選択するにいたる経緯はさまざまなのであるが、参考までに14名について直近の渡日時点での学歴を確認しておく、中等教育課程途中1名、中等教育課程修了4名、大学途中7名、大学卒業2名となっている。

### Ⅲ. 移行過程のなかのデカセギ

#### 1. デカセギに向かう理由

##### (1) 資金稼ぎ

日系ブラジル人青年が日本へのデカセギを選択する主要な理由は、やはり経済的なものであろう。今回の調査においても多くの対象者が、大学進学ないし継続のための学費を稼ぐため、あるいはよりよい職業生活を送るための資金稼ぎとしてデカセギの目的を語った。以下は、そうした経済的動機がデカセギ選択の主要な要因となっている事例である。

##### 【事例①】(21歳・女性)

ブラジルの高校を卒業すると同時に、大学進学のための資金を稼ぐため、2度目のデカセギに向かう兄（【事例③】）と一緒に日本へ向かった。

##### 【事例②】(24歳・女性)

ブラジルの私立大学で法律を学んでいたが、不況のあおりで両親の営む養鶏場が倒産してしまい学費の支払いが困難になったため、3年生を終えた時点で休学して日本へ向かった。

##### 【事例③】(24歳・男性)

2度の渡日経験を有している。1度目は2000年、家業である農業の不振でデカセギを選んだ父親を「自分も助けたい」と思い、中学校を卒業後、母親と一緒に父の暮らす栃木県宇都宮市へ向かった。渡日後は、滞日歴の長いおばの斡旋で自動車エンジンの配線に関する工場に仕事を見つけ、そこで3年間働いた。その後、いったん帰国し、高校を卒業した後に再び「資金を集めるという目的で」日本へ向かった。3年をデカセギの期限と決め、「期限内に稼げるだけ稼いで、すぐ帰国する」という決意をもった渡日だった。

**【事例④】(31歳・男性)**

2度の渡日経験を有している。1度目は1997年、ブラジルの高校を卒業後、大学進学が本来の希望だったが受験に失敗してしまったため、学費稼ぎのためのデカセギへと目標を切り替え、日本へ向かった。以降4年間、愛知県で転職を繰り返しながら働いた後、「仕事ばかりして家族が近くにいない」生活に疲れと物足りなさを感じたため帰国を決意した。帰国後は地元の私立大学に入学して経営学を学びはじめたが、手元にある資金だけでは大学生活が「ぎりぎりという感じ」であったため、少しは余裕のある生活を送るために3年生のときに再度日本へデカセギに出ることにした。

**(2)「解放」への期待**

しかし、日系ブラジル人青年のデカセギを経済的動機のみによって説明することには無理がある。というのも、デカセギの動機をめぐる対象者の語りのなかには、資金稼ぎの必要性和同時に、渡日前に自らが所属する場所に対して感じていた違和感や不満が少なからず含まれているからである。とりわけそれは、学校や職場と自己との折り合いをどうつけるかという青年期に特有の課題にかかわるものであるがゆえに、経済的動機のみで還元することのできないデカセギ選択の要因を考慮する必要性を示唆するものといえる。

**【事例⑤】(29歳・男性)**

ブラジルの高校に2年生まで通っていたが、父親の渡日が決まったのを期に自分もついていくことにした。高校を中退してデカセギを選んだのは、「勉強するのがあまり好きじゃないから」である。そして、「お金儲けをして、マイホーム、マイカーを買って、生活の質を上げる」という「みんながよくもちがちなイメージ」をもって日本へと向かった。

**【事例⑥】(24歳・男性)**

ブラジルで高校を卒業後、私立大学の法学部に入学して学んでいた。しかし、そこでの学びに満足できなかったため、「どうせ払っているのだったら、自分の勉強したいことをした方がいい」と思い、他大学への編入について父親に相談した。父親が彼の気持ちを汲んだうえで、卒業を条件に他大学への編入を認めてくれたため、その資金稼ぎを目的に日本へと向かった。渡日に際にしては、念のため大学の籍はそのままにしておき、休学手続きをとったということである。

**【事例⑦】(27歳・男性)**

ブラジルで私立高校を卒業後、友人と一緒に日本へ行って2年半ほど働き、帰国後に私立大学に入学した。大学への入学は、本人の希望というよりも親の意向に沿ったものであり、帰国に合わせて入学試験などの準備がすでに整えられていたそうである。大学ではリハビリテーションについて学んだが、「結構むずかしいんで、結構手こずった」という。そのため「学校に行くのがちょっとストレス」で、「朝と昼とずっと10何時間勉強して、もうすっげーイライラしたったから」、日本へ行けるチャンスを利用して再び日本へと向かった。

**【事例⑧】(33歳・女性)**

ブラジルで私立大学を卒業後、ある事務所で働きながら公務員の国家試験を受けるために自己投資を続けてきた。しかし、職場の雰囲気はあまりよいものではなく、そこで働き続けても自らの将

来を切り開くことにつながらないと感じていた。そのような折に、学び続けるための資金も不足気味になってきたため、日本へのデカセギを考えるようになった。

当時、[大学卒業まで働いていた運輸会社とは]別の事務所で仕事をしていて、あまり雰囲気はよくなかったんですね。それで、このままじゃちょっと見通しが立たないというか、自分が前進しないなということで、とりあえず日本へ行くかということ。

渡日の段階については違いが見られるが、いずれの事例からも、自らが当該の場所に所属することの積極的意義を見いだせず悩む様子を見てとることができる。そしてデカセギは、そのような居心地の悪い場所から脱出するための絶好の機会としてかれらの目に映り、選択されていると考えられるのである。その限りにおいて、かれらにとってのデカセギは〈いま - ここ〉からの「解放」への期待と深く結びついたものと言えるだろう。

### (3) 文化をめぐる2通りの期待

渡日の理由として文化的なものへ興味が強調されることもあった。興味の対象は日本語、サブカルチャー、ライフスタイルなどさまざまであったが、そのような「日本文化」への接近によって何を達成したいと願っているのかという観点からすれば、「日本」と自らの距離をどのように認識しているかに応じて2通りの期待のありようを指摘することができる。1つは、家庭や地域において日本に関わる文化的資源を比較的豊かに継承していることにより、日本に対する文化的近しさの感覚を有している場合である。この場合、渡日による文化的資源の豊富化が期待されることになる。もう1つは、継承された文化的資源が限定されたものであるがゆえに、文化的近しさを実感として感じられないことが、むしろ文化的な接近への欲求の増大に拍車をかけている場合である。この場合には、渡日によって文化的資源の欠如を埋め合わせることが期待される。以下では、この2通りの期待のありようについて事例を挙げながら具体的にみていくことにしよう。

#### ① 継承された文化的資源の豊富化

まずは、日本に関わる文化的資源を比較的豊かに継承していることが、さらなる資源獲得の欲求へと結びつき、デカセギを選択させている事例である。

#### 【事例⑥】(24歳・男性)

日系2世の父親の影響で美空ひばりや北島三郎の歌を小さい頃から好んで聞いていた。歌を通じて日本語への興味を強くもつようになっていたため、彼にとってデカセギは日本語を学ぶ絶好の機会であった。実際、滞日中、彼は自動車部品工場で働く傍ら、通勤途上で見かけ気になっていたというKUMONの教室に通い、水曜日と金曜日の週2回、夜の8時から日本語を学んでいた。月謝は8千円と決して安くはなかったが、彼には日本により近づくために必要な投資と感じられている。

ぼくは、KUMONの月謝は安いと思っていました。ジャスコとかゲームセンターとかマクドナルドとかに行っていたら、8千円なんてもう遊びながら使っちゃうので、自分のお金はちゃんと考えて使っていましたね。日本を旅するとか、日本を知るとか。決して高いとは思ってなかったです。

**【事例⑦】(27歳・男性)**

戦後に移住した両親をもち、ブラジルに育ちながらも日本を身近に感じる環境に育った。家庭での使用言語はほぼ日本語であり、「お父さんとお母さんも日本の話が結構あるし、そういう話にも結構慣れてる」と語る通り、家庭での話題も日本に関わる事柄が少なくなかったという。また、視聴するテレビ番組もNHKをはじめ日本のものが多く、ブラジルで入手困難な番組に関しては日本在住の親戚やデカセギに出ている知人が日本からビデオで送ってくれたりもしていた。そしてなによりも彼をひきつけたのは日本の漫画・アニメやおもちゃだった。『ドラゴンボール』などの漫画を熱心に読むだけでなく、高校生のときには「学校の友達をみんな集めて、場所を借りて普通のアニメとかを見せたり」するようなイベントを仲間と一緒に開いたりもした。また、おもちゃに関しては、『少年ジャンプ』など少年向けの雑誌に載っていたカタログを見ては「『あ、これいいなあ』とか、小さい頃から」あこがれていたという。したがって、彼にとって日本へ行くことは子どもの頃からの夢であり、高校卒業と同時の渡日に迷いはなかった。

もう小さい頃から、ほかの他の友達で、みんなで日本へ行こうっていうことだったんだ。もともと日本が好きだったから、小さい頃から。で、行こうかっていうことだったのね。一応僕は高校を出て、日本へ行く、そこまでの予定はあったね。大学やるつもりはなかったね。

渡日後は、最低でも8時間から11時間、場合によっては15、6時間働くこともあったという典型的なデカセギ生活を送りながらも、彼の意識のなかでは文化的資源の獲得が第一の目的であり続けている。

一応最初からお金目的でデカセギ行ったわけじゃなくて、日本に遊びに、お金は仕事して働いて、それで遊びにいくっていう予定だったよね。(中略)ほとんどのブラジルのデカセギは、日本に行って、お金貯めてブラジルに戻って何か買うのが予定だけど、ぼくのはもともと、おもちゃとかDVD、漫画とか、日本のなかの旅行とか行くのが一番の目的でしたね。

**② 不足する文化的資源の埋め合わせ**

次に、継承されるべき文化的資源を不十分にしか継承されていないという欠乏感を強く抱くがゆえに、その欠如を埋め合わせるべく、ある種の「真正性」を有する場として日本が目指される事例をみてみよう。

**【事例⑨】(23歳・男性)**

ブラジルの公立高校を卒業後、私立大学に通ったが、「大学に行っても、あまり大学の意味が見いだせなかった」ため、2年生の途中で休学して日本へ向かった。大学の意味への問いは、自らの「ルーツ」に関する問いとほとんど重なるものであった。とりわけ彼の存在論的不安の拡大に影響を及ぼしたのが、彼自身の日本語能力の不足に対して周囲から注がれるまなざしであった。「日本語のできない日系人」という位置づけが彼を苦しめたのである。

たとえば、いろんな人に「あんた日本人の顔をしているけど、なんで日本語をしゃべれないの」と言われることに、ものすごくいらだちを感じるわけです。たしかに日本人の血が流れているに

もかかわらず、読めない書けないというのは日系人としてはしんどいかなと思います。何で両親は書けるのにぼくは書けないんだとか、しゃべれるのにぼくはしゃべれないんだとか。その辺りが一番大きかったかなという感じがしますね。

そして、自らのルーツをめぐる疑問について両親（ともに日系2世）から納得のいく回答を得られなかったことが、存在論的不安をいっそう拡大させていくことになった。

もともと両親は、かれら自身の親と話をする機会があまりなかった。生活自体が仕事ばかりだったので。だから、答えても「わからない」、そればかりだったんですね。

つまり彼には、日本に関する文化的資源を欠くことによって自らが帰属を願う日系人コミュニティの「正統な」成員になれないことに対する忸怩たる思いがあったわけである。その彼にとって渡日は、このような存在論的不安が大学に通う意味ひいては人生そのものの意味を曖昧にしている状況を打破すべく、文化的な「真正性」を有するものとして意味づけられた日本という場に身を置くことで、自らの「ルーツ」に対する確かな手応えを獲得することを最大の目的としたものだったのである。

日本へ行くことによって、自分が気になっていたものを確認するのと、ちゃんと人生観というのか、自分自身に自信を持てるようなきっかけづくりにしたかったんです。【もともと日本に対するどういう関心があったんですか？】私の出自を知りたかったんですね。自分自身がどこからきているのかということを理解することによって、いま実際やっていることに対する自覚、自信をもつために。たとえ両親に聞いたとしても、まともな答え方をするわけではないので、それであれば自分の目で、もともとどういう人間なのか、どこから生まれたのか、それを確認したかったんです。

## 2. デカセギの「現実」—日本で出会う「ブラジル」

では、渡日後、実際に経験することになるデカセギ生活は、かれらの期待に応えるものだったのだろうか。つまりここで、論じるべき焦点はデカセギの「現実」へと移るわけであるが、その「現実」は抽象的な「日本」ではなく、より具体性を帯びた場において展開されるものであることに留意する必要がある。それはどのような特徴をもつ場なのであろうか。

デカセギを希望する日系ブラジル人は、居住面も含めて斡旋業者に依存するかたちで製造業中心の労働市場に参入するという経緯をたどることが多いため、しばしば同胞が集住する地域に暮らし始めることになる。集住地域においてはブラジル食材店、ポルトガル語の新聞やテレビ、ブラジル人学校など利用できるエスニック資源も多いため、日本語が十分に理解できなくても、さほど不便を感じることなく日常生活を送ることができる。これは見方を変えれば、日本人や日本社会との接触によって生じる摩擦やストレスを未然に回避できるということであるが、このことは、効率的な資金稼ぎへの集中を可能にする一方で、日本にいながら同胞内に経験が閉ざされることでもあるため、渡日前の期待との間に齟齬が生じることもある。同胞集住地域に特徴的なこのような状況を、対象者たちはどのように利用したり克服したりしようと試みるのだろうか。また、そのことによる得失はいかなるものなのだろうか。以下、事例に即して見ていくことにする。

### (1) 資金稼ぎの効率性の確保

デカセギを何よりも資金稼ぎの手段と考える人びとにとって、職場以外で日本社会への参入を強いられることなく、また同胞との適度な交友関係を保ちながら生活を営むことのできる環境は、効率的な目標達成を支える条件となる。また、このような環境においては、仕事に専念することが可能になるだけでなく、職場以外での日本社会との接点が消費という窓口に限定されることが多いため、日本での経験を語る際には、便利さや快適さが強調される傾向がみられた。

#### 【事例⑩】(19歳・女性)

ブラジルの私立高校を卒業した後、すでに渡日経験のある姉と日本へ向かい、千葉県で一緒に暮らした。当初から1年で帰国の予定であり、「そのときにはちゃんと勉強するつもりでいた」ので、滞日中は仕事に専念したという。よりよい条件を求めて職場を2度かえた。最後で最長の職場となった弁当工場では300人ほどのブラジル人が働いており、「リーダー的な役割を担っている人たちも割とブラジル人だったりペルー人だったりしたので、たまに日本語を使うこともありましたけど、あまり使う必要はありませんでした」と語る通り、同胞に囲まれ言語的にもとくに困ることのない環境であった。他方、滞日中の生活に関しては、「日本という国はすごく移動が便利な国だし、何をしてもすごく便利な国」であり、「たとえばコンビニとかすぐに行ける」ことなどを考えると、帰国した現在でも日本へ「戻りたいな」と感じることはあるという。

#### 【事例⑪】(21歳・女性)

大学進学のための資金を稼ぐことを目的として向かった先の愛知県豊田市には、家業である農業の不振からデカセギに踏み切った両親がすでに暮らしていたため、家族4人での生活が始まった。滞日中は工場での検査の仕事を続けた。仕事自体が初めての経験だったが、「母と一緒に同じ職場で仕事をしたので、よく助けてもらったりしていたので、私自身は結構、働くのは好きでした」と語る。

当初から3年間という期限を決めてのデカセギであり、その点については父親も厳しかったので期限通りに帰国した。日本での生活については「結構気に入りました」と語る。その理由には、「町がきれいで、清潔感があって、落ち着いている」という言葉で表現される都市環境の快適さや安定した収入といった諸条件の他に、居住地で形成された人間関係も重要な要因として含まれている。

やっぱり月末になって給料が入るということは大きかったですし、友達もいっぱいいたし。あと、恋人ができたというのも1つの大きな理由かなと思います。

#### 【事例⑧】(33歳・女性)

将来の見えぬ現状を打破し、キャリア・アップのために自己投資するための資金を稼ぐことを目的に渡日を決意した。そして、福井県の精密部品製造工場で毎日12時間の労働を4年間続けることになる。滞日中、生活にとくに困難を感じたことはなかったという。「日本ではブラジル人が多かったのも、むしろポルトガル語のほうが多かった」という環境は、仕事に慣れるのを容易にすると同時に、信頼のある友人関係を築くことを可能にした。

結果的に日本では、たまたま信頼できる友達ができたんです。ルームシェアしたカップルなんかも、ものすごくいい人たちで、いまだに頼りにしているんですね。帰るときには、まだ支払わ



れる給料があったので、預かってもらっているし。そういう意味ではものすごく信頼していて。ほんと偶然いい関係の人たちなんですけど。そういうのができたから、やっぱりちょっともったいないというのか、また会いたいと思います。

## （2）「解放感」の維持と新たなストレス

同胞集住地域に居住することで異文化・異言語環境に参入する際に生じるストレスが大幅に軽減され、効率的に資金を稼ぐことに集中できるという状況は、「解放」への期待とともにデカセギを選択した人びとが「解放感」を維持するうえでそれなりの有効性をもつようである。

### 【事例⑧】（33歳・女性）

精密部品製造の工場で3時間の残業を含め毎日12時間働く生活は、ブラジルでの事務職と比べれば、少なくとも肉体的には重労働であることには違いない。しかし彼女にとって日本の職場は、心配事から解放され精神的に気楽でいられる場所であると感じられている。

むしろ楽でしたね。ブラジルだといろんな心配事がありましたけど、日本では工場のグループのリーダーが全部解決して、与えられた仕事をするだけだったので。

### 【事例⑦】（27歳・男性）

滞日中に5つの職場を転々としているが、いずれの職場も長時間労働であることには変わりはない。最後の職場（電車レールの製造）では体調を崩して鼻血を出したこともあったというが、それでも彼にとって、日本での仕事は「普通にやって、ちゃんとやったら、それでいける」ものであり、「仕事をしてるときより、勉強するほうがストレスたまる」という認識は変わらない。過酷というよりむしろブラジルで慣れ親しんだことの延長線上に位置づくものとして経験されている。

昔から仕事はやるのは慣れとったから、〔日本でも〕そんなに違ってないね。【それは、ブラジルにいるときから割と仕事をしてたからということ？】そう。ま、工場じゃないけどね。うちら柔道の道場もっているから、そこの手伝いとか、まあ、小さい頃からレンタルビデオ屋さんとか、いろんな仕事やってるから。だから、仕事の場合は、そんなにたいへんとは思わなかったね。

とはいえ、職場は日本人、とりわけ日本人「上司」との接触を否応なしに迫る場所でもある。その接触は、日本社会における自らの劣位を思い知らされる経験であることも少なくない。それによって生じるストレスにどのように対処するかが、デカセギ生活をめぐる新たな課題として浮上する。

### 【事例⑧】（33歳・女性）

「結構ストレスになっていたのが、正社員はやってもいいけど、私たちが同じことをしてはいけないというようなことですね。たとえば、足が痛いからちょっと座って作業をやるというのは、正社員だったら許されるのに、私たちは許されない。そういうことにやっぱり腹が立つというか。私たちのブラジル人のリーダーに文句を言うんですけど、それが上司まで伝わるということはありませんでした。まあ、言ってもしょうがないからということで。それは結構しんどかったですね。他に

も、同じ作業でも私たちはものすごく仕事をするんですよね。でも、日本人はものすごく遅いペースでやるんです。私たちは量と質の両方を求められるんですけど、日本人の方は別にそんなに多くの量をやらない。そのぶん私たちが量としかも質を出さなければいけないというね。(中略)その辺の区別があったので、やっぱりストレスの原因になっていましたね。」

### 【事例③】(24歳・男性)

2度目のデカセギ先である豊田市では、工場で溶接の仕事をして働いた。「残業ばかり。土曜日も一日中仕事をしていて、仕事以外は過ごす時間がなかった」というほど、仕事一辺倒の生活をしていたという。彼は日本を「近代的な感じがして、生活するには不自由なく生活できる」場所とし、「住むぶんには、お金も稼げる」ので悪くないと述べる一方で、日本での生活は自らが使い捨てるの労働力であることを黙って受け入れるかぎりで見えなくなっていると認識しており、損失を避けるために黙って従う存在であることを自らに課していた。

結局、この国は自分の国じゃないんだなって。だから従うしかないんだなって。衝突すれば、最終的には自分が職を失うことになるから、損するのは会社じゃなくて自分自身なんですよ。そういうのはたまにいますけど、殴り合いとかね。でも首を切られたらもう自分が損をするので、基本的に私たちが日本を必要としている以上は、従わざるを得ないのかなと思いますね。

### (3)「ホーム」感覚の醸成

今回の調査では、同胞集住地域が人びとを異文化・異言語環境下でのストレスから守る防御壁として働くことで効率的な資金稼ぎを支える機能を有するにとどまらず、ホスト社会のなかで「ここが私の居場所」と感じることでできる意味空間、すなわち「ホーム」の感覚を醸成するための重要な役割を果たすケースもみられた。

### 【事例⑤】(29歳・男性)

ブラジルで通っていた高校を中退して1997年に渡日し、2009年8月に帰国するまでの12年間を静岡県浜松市で過ごした。滞日中には同職場への出入りも含め6回の転職を経験している。

デカセギ生活も半ばにさしかかった頃、彼に大きな転機が訪れた。親しくしていた女性との間に息子が生まれたのである。それをきっかけに彼の生活は息子との関係を軸に組織化されるようになる。「上司の監視がない」ので気に入っていた夜勤も、「息子と会う機会がないということで」昼勤に変えた。また、あくまでも帰国が前提であったことから、息子が4歳になった時点でブラジル人学校に通わせることにした。8時に出勤して20時に帰宅し、ジムに出かけて1時間ほど汗を流した後は自宅ですっきりと息子との時間を過ごし、23時に就寝というのが平日の過ごし方であった。そして、仕事のない週末にはショッピング・モールに出向き、子ども用遊具のあるスペースやファーストフード店などで家族の時間を過ごすことを習慣としていた。

また、長い滞日期間中には多くの同胞と知り合い、友情を深めることにもなった。彼は日本で培った友人関係について、「極端な言い方ですけど」と断りながら、「4ヶ月前(帰国した時期)にぼくが死んでいたとしたら、おそらく日本でぼくを見に来てくれる人たちの数は、ここ(ブラジル)と比べてはるかに多かったんじゃないかと思います」と語っている。

彼にとって、浜松市はまさに「ぼくの人生がそこで始まった」と感じることでできる場所であっ

た。そこで初めて「責任感を持てた」し、「自分の家族がそこで形成された」からである。「そこで結婚し、子どもも生まれた。ある意味、浜松はぼくの最初の家」と言い、「自分は当然日本人というわけじゃないですけど、居心地がすごくよかったですね」と語る。ここで描かれているのは、同胞と豊かな関係を築きながらホスト社会における「ホーム」感覚を形成していく過程と言ってよい。

彼は、ブラジルを知らない息子のためという内在的理由と、2008年秋のリーマンショック以降の不況のあおりを受けての大量解雇という外在的理由により、結果的には家族揃っての帰国を選択した。しかし、そのことによって日本での永住という選択肢が完全になくなったわけではない。むしろ、同胞との豊かな関係のもとに形成された「ホーム」感覚は、永住を選択した場合にとるべき生活上の戦略をより具体的に構想することを可能にしている。

仮に日本で生活し続けるということになれば、当然子どもの通う学校についても考え方を変えないといけない。そうすると、子どもには日本の学校に通わせたり。あとは自分たちの意識の問題ですよ。帰国するということであれば、当然日本語はそう必要ではないですけど、でも、居続けるということになれば、たとえば近所との付き合いというのは必要となってきますし、そうすると日本語はもう欠かせないので、私たちが現地の生活に適応していくというか。日本で生活し続けるのであれば、日本でローンを組んで家を買った方が早くなって。私たちがやはり意識を変えていかないとダメなのかなと思います。

日本で生活する上での戦略の大幅な転換の必要性が述べられている。ここからわれわれは何を読みとることができるだろうか。同胞コミュニティのもとで形成された「ホーム」感覚は、ともすればホスト社会から隔絶されたかたちで維持・強化されると考えられがちである。しかし、上記の語りが示唆するのは、「ホーム」感覚はかならずしも同胞コミュニティの維持・強化にのみ寄与するのではなく、むしろ「ホーム」感覚がもたらす安心感や安定感を土台として、ホスト社会との新たなかわりの模索を可能にするということである。樋口直人は、移民コミュニティの強化による資源蓄積の必要性を「統合」に必要な条件として挙げているが（樋口2005）、「ホーム」感覚の形成は「統合」に有効な資源蓄積にとって不可欠の要素の1つといえるのではないだろうか。

ただし、この点については、日系ブラジル人のデカセギが市場原理の貫徹した生活の組織化を強いられがちなことに起因する「ホーム」感覚の形成のむずかしさを今一度確認しておく必要があるだろう。たとえば【事例⑩】（25歳・女性）は、ブラジルの私立大学に在学中に父親が病に倒れて手術を受ける必要が生じ、学費の捻出が困難になったために1年生の途中で休学し、渡日を決意した。愛知県半田市に居住し、「貯金しなくてはいけないというプレッシャー」のなか、自動車部品工場毎日8時から20時まで働く「キツキツの生活」を2年間続けたが、それは「あの生活を送り続けたくなかった」と振り返るように彼女にとっては「正直きつい」ものであった。職場は「ブラジル人ばかりで日本語を話す必要はない」ような同胞に囲まれた環境であったが、かれらとの間で信頼関係を築くことはむずかしいと感じられてきた。このことについて彼女は、「日本で友達になっても、明日になったらどうなるかわからない。すぐ帰国してしまう人たちもなかには当然いるわけですから」と語っている。これは、資本主義の論理に露骨なかたちでさらされ、フレキシブルな労働力として移動が日常化している状況において、ある程度の継続的なかわりを要する友情関係を築くことのむずかしさを端的に表現したものといえるだろう。このことを考えれば、【事例⑤】が経験し得たような「ホーム」感覚の形成は基本的には構造的な困難を抱えていることがわかる。

#### (4) 文化的資源獲得の努力とその意図せざる結果

同胞集住地域での居住は、効率的な資金稼ぎを可能にする一方で、日本にいながら同胞内に経験が閉ざされる傾向を強化することになる。そのような傾向は、日本に関わる文化的資源の獲得を期待してデカセギを選択した者にとっては足枷と感じられるものであるため、同胞に囲まれた環境の外部にそうした文化的資源獲得の機会を積極的に求めるケースもあった。

##### 【事例⑥】(24歳・男性)

父親の影響で日本の歌が好きになり、それを通じて日本語への高い興味をもって渡日した彼にとって、渡日後の居住地となった浜松市はブラジル人が集住していたため「自分が寂しくならないという意味ではもちろんよかった」という。ところが、そのように同胞集住地域に居住することの利点に言及する一方で、同胞に囲まれることで日本社会との接触が限定的なものになってしまうことに対する不満を語っている。

自分としてはやっぱり新しい言葉を学びたいという気持ちもあったし、新しい文化に触れたいということもあったんです。そういう意味ではあまりよくなかったですね。ブラジル人がたくさんいたので、それが1つの障害になっていたんです。

彼が、そのような制約を打破すべくKUMONの教室で日本語を学習し始めたのは先述した通りである。また、好きな歌を通じて職場の日本人とも積極的にコミュニケーションをとろうと努めたという。

そんなに日本語はできないんだけども、日本人とよくカラオケには行ってましたね。演歌が大好きで。日本の伝統的な音楽とか。日本語はできないにしても、やっぱり自分の知ってる単語とか、あとは英語でなんとかしていましたね。本当にコミュニケーションには全然問題がなかったです。

ただし、豊かな文化的資源を有し、日本社会との接触の機会を拡大させていくことは、意図の有無にかかわらず当人を境界的な位置に立たせることになる。とりわけホスト社会における支配的言語に長けている者は、そのことによって享受しうる恩恵と強いられる苦勞の間で葛藤を経験することになりやすい。

##### 【事例⑫】(27歳・男性)

ブラジルの公立大学で建築を学んでいたが、「今じゃないと行けないかな」と思い、3年生を終えた時点で渡日を決めた。その際には、日本の大学に編入して建築の勉強を続けようという思いもあったようだが、滞日中にその思いを行動に移すことはなかった。実際には、渡日前から派遣会社を通じて福井県の工場で製品の測定の仕事をする事が決まっており、すぐに働き始めることになった。彼の両親は日本からの戦後移民であり、家庭での使用言語は日本語のみであったため、小学校に入る段階でも話せるのは日本語のみで、ポルトガル語はまったく理解できなかったという。ただし、ブラジルでの生活においてとくに日本語の読み書きを習う機会はなかったため、身に付いていたのは会話能力のみであった。それでも、「日本語も話せなかったらできない仕事」だからとい

うことで斡旋されたのは、パソコンを使用した製品の測定という「軽い仕事」だったということである。

渡日後は、工場で働く傍ら、日本語を学ぶために地域の国際センターに通いはじめた。1つには、両親から受け継いだ日本語は「古い言葉」と感じられていたため、現在使用されている日本語を学びたいという気持ちがあり、もう1つには「大学にもいいと思って」いたからであった（同じ思いから、民間の英語学校に通って英語も学んでいる）。しかし、もともと日本語の会話能力には長けている彼にとって、国際センターで開講されている日本語クラスはレベルにあったものではなかったため、講師と交渉して個別に指導してもらったという。

国際センターに通い続けていると、いろいろと声をかけられるようになった。まず依頼されたのがポルトガル語のボランティア講師である。ブラジル人の幼児を抱える保育所で働く女性、ブラジル人を夫にもつ妻、大学生ら合わせて10人を対象に休日を利用してポルトガル語を教えた経験は、「教えるのだけじゃなく、人間関係が感じよくなれたというか、楽しくてやっていました」と言えるものであった。

もう1つ依頼を受けたのが、市役所で作成するブラジル人向けのパンフレットの翻訳の仕事であった。報酬は少額であったが、「勉強としては助かっていた」ため、仕事自体にはとくに不満を感じることはなかった。むしろ彼が強烈に違和感を感じたのは、この翻訳の仕事を通じて出会うことになった同胞の姿であった。苦勞して翻訳したパンフレットを読んでくれなかったり、配布協力の要請に難色を示す同胞に、彼は不信感を募らせていった。

やっぱり市役所でやってた翻訳とか、ブラジル人のためにやってるのに、それ全然読んでくれないとか。ほんとに2、3ページの、そういうちょっとしたものでしたんですけども、全然読んでくれないとか。いろいろのお店とかまわしてるのに、そのお店もまわしてくれないとか。【お店もまわしてくれないっていうのは？】ブラジル料理のお店とか。そういう人たちにも頼んで、一応市役所の方から、ちょっと配ることできないかっていうような感じで。そういうのもやってくれないというような感じで。(中略) ちょっと、しゃくにさわるというか。ほんとにもう、一所懸命やってるのに、その2、3ページも読んでくれるのも読んでくれないし。

高い日本語能力を有するがゆえに経験せざるを得ない葛藤は、職場においても生じた。前述の通り、渡日時に斡旋された仕事は彼の日本語能力が買われてのものであった。ところが、日本語ができることにより、職場で問題が生じた場合の通訳役を要求されることが多くなり、さらにはそれが当然視されるに至る。正規の仕事以外にこのような無償の負担を強いられる状況に、彼は次第に耐えられなくなってきた。

他の人と同じ仕事やってるのに、まだ通訳と、会社のなかでも翻訳やってたんですよ。意外とストレスたまっちゃって。もうこれ、いやになって。

結局、職場におけるそのような過重負担から逃れるために、愛知県岡崎市の自動車部品工場へと転職を決意した。しかしながら、新たな職場に移っても同様の状況はついてまわった。その職場ではリーダーや班長をブラジル人が務めていたが、かれらよりも日本語が堪能であったがために、「3ヶ月、4ヶ月経ったらまた同じような感じになってきました、やっぱり」と語る。

高い日本語能力を身に付けていることは、仕事の選択肢の拡大をもたらす一方で、通訳ないし翻訳という役割を担わされることによって、職場での過重負担や地域において同胞との間で生じる軋轢に悩むことにもなりやすい。すなわち、同胞社会と思わぬかたちで接触することになり、デカセギの効率をむしろ低下させてしまうというジレンマを抱えることになりかねないのである。

### 3. 帰国後の再出発

日本でのデカセギを終えて帰国した日系ブラジル人青年は、その経験をどのように意味づけ、帰国後に自らが描いていくことになる人生経路をどのように展望しているのだろうか。また、そのような意味づけや展望はどのような条件に支えられてなされるものなのであろうか。以下では、再出発の条件や困難、あるいは再出発にあたっての仕切り直しのありようについて、事例を挙げながら検討することにする。

#### (1) 再出発を支える条件

デカセギ自体は本人の意志によるものであったとしても、帰国の理由は必ずしも本人の意志のみに帰してすませられるものではない。確かに、大学進学ないし継続のため、もしくは期限を定めたいうえでの資金稼ぎという明確な目標をもって渡日し、当初の目的を達成した後に自らの意志で帰国するケースは存在する。これらの人びとは、帰国後の自らの進路について大きな迷いを感じることはあまりなく、渡日前の目標に即してブラジル社会に再参入を果たしているといつてよい。だが他方、それぞれに目的をもっての渡日であったとしても、不況による仕事の激減や解雇あるいは家族の病や死などによって、不本意ながらも帰国を余儀なくされるケースも存在する。この場合、帰国後に態勢を立て直し、自己の人生経路を思い描けるかどうかには、ブラジル社会への再参入を支える資源の有無が大きな影響を及ぼすことになる。

#### ① 目標達成後に帰国した場合—順接的人生経路

まずは、当初の目的を達成した後に自らの意志によって帰国したケースである。この場合、渡日前の目標に即したかたちで帰国後の再参入が目指されるため、人生経路は順接的に築かれることになる。

#### 【事例⑩】(19歳・女性)

高校時代の友人はほぼ例外なく大学進学を希望している。彼女自身も、将来の職業として薬剤師を目指しており、大学進学は自らの将来を築くための前提と考えている。そのため、帰国後はすぐに大学受験のための予備校に通い始めた。そして最近、いくつかの大学を受験し、現在は結果待ちの状況であるということである。希望通りに仕事を得ることができれば、「日本で得られるような収入はブラジルでも十分得られる」と考えており、家族と一緒に過ごせるブラジルで生活していくことについて気持ちが揺らぐことはない。

#### 【事例②】(33歳・女性)

大学を継続するための資金稼ぎという明確な目的をもって渡日した。約3年間のデカセギ生活を終えて2008年に帰国して以降は、復学し、弁護士を目指して勉学に励んでいる。彼女にとって日本へのデカセギは、自らが希望する進路を切り開いていくうえで必要な資源を獲得するための機会と

して明確に位置づけられている。

今回、もし日本へ行くことがなかったとすれば、自分の将来はおそらく多くのブラジル人と同じように、もう少し生活水準が低い状態になっていたんじゃないかと思います。だから、日本は大学に行くためのチャンスを与えてくれた国というふうには私は理解しています。

#### 【事例①】(21歳・女性)

大学進学のための資金稼ぎという明確な目的をもって渡日した。自らが設定した3年間のデカセギ生活を終えて帰国するとすぐに、大学受験準備のための予備校に通い始めた。しかし、日本での3年間、学習とは無縁の生活を送ってきた彼女にとって、予備校通いは楽ではない。「やっぱりそんなに簡単じゃないです。まず忘れているということと、勉強のリズムがまったく崩れているので」とこぼすように、滞日中に身に付けた仕事中心の生活を、学習中心の生活に組織し直していくことはそれほど容易なことではない。それでも、栄養管理を学べる大学に入り、「卒業して、できればブラジルにずっと残っていきたい」という思いを実現すべく、大学受験に向けて準備を進めている。

#### 【事例④】(31歳・男性)

大学生活に余裕をもたせたいという動機から、大学3年生の時点で2度目の渡日を決意した。2年9ヶ月の滞日生活を終えて「大学を終わるため」に2008年1月に帰国した。帰国後は、大学に通いながらガソリン・スタンドにインターンシップで入った。「給料が安かったけれども、とりあえず労働市場に入っているというのはとても大事なことだったので」始めたのだという。その後、大学の教員からバストスにある養鶏関係の会社を紹介され、インターンシップで入ることになった。そして、2009年12月に大学を卒業するのにともなって、その会社から正社員として内定の通知を受け取ったところである。キューバやベネズエラへの市場の拡大を含め、さまざまなプロジェクトを任せられるというこの会社には、「自分をすごくステップ・アップしていける機会」として大きな期待をかけている。

#### 【事例⑩】(25歳・女性)

大学を継続するための資金稼ぎという明確な目的のもと日本へ向かった。仕事中心の「正直きつい」生活を2年間続けて2008年に帰国したときには、籍をおいていた大学の休学期限をすでに超過してしまっており、復学できなかったという。仕方がないので同大学を再度受験して合格し、1年生の初めからやり直しているところである。帰国後、商品の豊富さや生活の便利さという点で日伯を比較して日本社会の魅力をあらためて認識するというものもないではないが、「それがすべてというわけでもない」とも感じている。とりわけ、家族と「ゆったりとした生活リズム」のなかで暮らせることは、彼女にとって何よりも重視されるべきことであり、そのような生活を維持すべく、「すごく安定的な職」とされる公務員になることが現在の目標である。

#### 【事例③】(24歳・男性)

3年という期限を終えて帰国した後は、自身もデカセギの経験があり現在はすでに帰国してもととの家業であった農業に従事している父を手伝いながら、政府が無料で提供しているIT関係の研修コース(1年半)を受講しているところである。これを修了すれば、給料には差があるとしても、

採用可能性そのものは大卒者よりもむしろ高いと聞いているので、条件としては決して悪くないと考えている。再渡日は万が一の場合の選択肢としてないわけではないが、「極力それは避けたい」。自らが職業人として独り立ちするために必要な資金はすでに十分蓄えたと思うので、「いま、なんとかそれを成し遂げよう」と奮闘している最中である。

## ② 不本意なかたちで帰国した場合—接合的人生経路

次に取り上げるのは、不本意なかたちで帰国を余儀なくされながらも、利用可能な資源に支えられてブラジル社会への再参入が可能になっているケースである。この場合は、渡日前の目標と必ずしも一致しているわけではないが、渡日前の状況に利用可能な資源を接合しながら人生経路が築かれることになる。

### 【事例⑦】(27歳・男性)

漫画、アニメ、おもちゃといった文化的資源のいっそうの獲得を第一の目的として日本へのデカセギを選択した。2度目の渡日時には栃木県で工場労働に従事していたのだが、2008年8月頃から仕事が減っていき、ついには失職してしまった。仕方なく、日系人男性と結婚して神奈川県に暮らす姉のもとに1ヶ月ほど身を寄せた後、埼玉県に移動し、建設会社で電車レールの製造などの仕事に従事する。しかし、ここでも仕事はさほどなかったため、「自分らが稼いだお金は、ちょうどアパート代、食べ物代払った分ぐらいしかなかった」。そのうえ、体調を崩し鼻血が頻繁に出るようになったため、帰国を決意し、2009年6月にブラジルへ戻って来た。帰国の際には、3万円ほどしか手元に残ってなかったという。

帰国後は、渡日前に通っていた大学とは異なる大学、しかも2つの大学にあらためて入学している。1つは食料に関することについて学ぶための公立大学、もう1つは体育について学ぶための私立大学である。後者に関しては、渡日前に通っていた大学でリハビリテーションについて学んでいたときに取得した単位がそのまま認められるということである。

ただし、大学卒業後にとくに希望する職業について「予定とかはまったくない」という。ここで彼が語っているのは、就職の難しさではなく、彼が感じているところの選択肢の幅広さである。

できることがかなり多いんで、だから1つに絞るってあんまりないね。小さい頃から、大きくなったら医者になりたい、大きくなったら政治家になりたいとか、そういう考えはないね。【できることが多い。】そう。だから、たとえば新しい仕事ができ、「ああ、これは面白い。やろう」ということがあれば、もうそこに入ってやるのも可能なので。だから、どうしてもこれをやるということは、まずないね。時代が変わって、今はコンピューターが結構あるし、コンピューターの仕事も不可能ではないし。今は食料の大学をやっているから、そっちの方も。マリリアは、そういう食べ物の聖地っていうのかな、ブラジルでも結構大きな食べ物の材料とかビスケットとかの会社もいっぱいあるから、そっちもできるし。だから、決まっはいいないね、必ずこれをやりたいっていうのは。

彼がこのように比較的自由に自らの将来の選択肢を思い描けるのは、それを支える確実な経済的基盤があるからこそと考えられる。というのも、彼の父親は自らの道場を所有し柔道の指導を行なう傍らマッサージ業も営んでおり、その家業を継ぐことも、彼にとって有力かつ堅実な選択肢の1



つになっているからである。

【仮にブラジルで住み続けるとしたときに、自分はどんな仕事をしそうですか？】う～ん、まあ、この流れでいくと、おそらく柔道とかの先生とかのやる可能性があるし。【柔道の先生をやるということは、お父さんのやっている道場を継ぐということになりますか？】なりますね。【お父さんは継いでほしいという気持ちがあるのでしょうか？】あると思いますね。柔道もマッサージの方も。結構小さい頃からマッサージは教えてもらってるから。だから前もリハビリの大学やったりしたし。だから体のことは結構わかってる方だから、そっちもできるし、柔道の方もできますね。

親から受け継ぐことのできる安定した生活基盤の存在が、自らの将来に対するある種の鷹揚な態度を可能にしていると言えるだろう。

#### 【事例⑬】(28歳・男性)

ブラジルの私立大学を卒業した後、数年間は家業である建材会社を手伝っていたが、かねてより自力で何らかの店を開きたいと考えていた。しかし、そのための資金づくりがブラジルでは思うようにいかないため、「あっちのほうが、お金もっと早う集められるなと思って」日本へのデカセギを決意する。2005年に渡日して以降は、事前に派遣先として決まっていた福井県の電子部品製造工場で働いた。渡日後4年半が経過し、ブラジルに暮らす両親や祖父母と会いたいという気持ちも強くなってきたため、あと1年間働いてとりあえず帰国しようと考えていた矢先に飛び込んできたのが、父親が重病との知らせである。荷物をまとめて帰国を急いだのは仕方のないことであった。父親が亡き人となるのは、それから1ヶ月ほど後のことである（それはちょうど、インタビューの2週間前の出来事であった）。

それからは、遺産相続の手続きなどで忙殺される日々を送っており、「考える暇もない」ほどであるが、父親なき後、家業の維持という重責を自らが負わざるを得ないことは十分に承知している。しかし、彼にとって家業の維持は、長男としての責任という立場上の問題にとどまらぬ重要な意味をもっている。それは、彼がデカセギを選択した理由と深く関わっている。

彼にとってデカセギは、自立した姿を父親に認めてもらいたいがために踏み出した一歩であった。

自分で1人でやれるなって、お父さんにすごいなって言われたかった。日本に行って、自分でお金貯めて、自分で店を開いたり、何でもできるようになったなって。それをお父さんに見せたかったね。

そのように考えていた当時、父親が経営する建材会社は、自らが自立するために身を引き離すべき対象であった。しかし、父親なき後、状況はまったく変わった。会社について「お父さんのものだったから、今は、やっぱり大きくしてみせたいなと思ってる」と語るように、彼にとって家業を受け継ぎ、維持・拡大していくことこそが、父親の承認を受けるための自立した自己の姿として新たに、そして明確にイメージされている。

受け継ぐことのできる安定した生活基盤があり、そのことが存在論的な安定にもつながっている点では【事例⑦】と似通っているとも言えるが、受け継ぐ意志が明確である分、【事例⑬】の将来展

望はより地に足の着いたものになっていると言えるだろう。

## (2) 再出発の困難と存在論的不安—揺らぐ人生経路

皮肉なことではあるが、ブラジル人集住地域での生活が効率的な資金稼ぎのための手段という意味合いにとどまらず、表出的な側面も含めて充足したものとして経験されていた場合、もしくはブラジル人非集住地域での生活が長く日本社会への参入の度合いが高かった場合、帰国した後に存在論的不安に悩まされる傾向があり、ブラジル社会への再参入に困難を感じる状況が生じやすいようである。ここでは、そのようなかたちで人生経路に揺らぎが生じる事例を2つ取りあげてみたい。

### 【事例⑤】(29歳・男性)

浜松市での12年間にわたる生活を通じて、同胞コミュニティを生活の拠り所としながらホスト社会における「ホーム」感覚を形成してきた。しかしながら、不況による解雇とブラジルを知らない息子の教育のためという理由から、「ぼくの最初の家」と呼べるほどに愛着を感じていた浜松市をあとに、帰国を決意する。

帰国した当初は、「100円ショップとか交通、マナー」あるいは店のきれいさや品揃えなどをブラジルと比較しては、「日本へ戻りたくてしょうがなかった」という。それでも、「やっぱりブラジルに戻った以上、現地での適応はせざるを得ない」と自らを鼓舞し、動き始めたところである。現在は、自動車とオートバイの運転免許を取得する一方で、日本へのデカセギから帰って再び自動車整備の仕事を始めた父を手伝っている。また、「今のブラジルでは学歴がないとむずかしい」との判断から、中等教育課程修了資格の取得を決意し、人づてに試験対策のための家庭教師を見つけて雇い、学習に励んだ結果、無事スペレチーボ試験に合格した。中等教育課程修了資格取得と同時に、安定した職に就くために警察官採用試験を受けた。第1次試験は合格し、現在、第2次試験の結果を待っているところである。

ただし、心情的には「日本にいればよかった」と思うことはしばしばあり、自分たち夫婦が「ある意味方向性を失っているような感じ」を抱いてしまうことも否めない。帰国後の妻の様子について、日本では「自分の仕事があり、お金もあり、自分の家があった」が、現在は義理の父母と同居しているために「自由がない」のかもしれないと語る。だからといって、日本で身に付いた「仕事の生活リズム」を取り戻そうとしても、中等教育課程修了資格のない妻にとって職探しも容易ではない。

ブラジルで仕事を探そうと思っても、学歴の問題で、妻も高卒じゃないからむずかしいねって言われてしまうんですね。

また、彼自身にとっても、12年ぶりに帰って来た故郷は、すでに知り合いもほとんどいない、よそよそしい土地へと変貌していた。

ここ(トッパン)は地元ではあるんですけど、やっぱりみんなもう、ぼくのことを知らないし、出て行っている人も当然多くいると思います。

このように「自分の国にいながら外国人の気分」で過ごさざるを得ない土地で、夫婦ともに迷い

を簡単には拭い去ることはできない。実際、日本での生活とブラジルでの生活を比較しながら、「いろんな意味でどうしても違うので、うまく行かなかったら、もしかしたら日本へ戻ろうかなと考え」がちであるとも語っている。だがその一方で、息子には「日本とブラジルで気持ちが分かれることにはなってほしくない」と強く願っている。息子の安定した成長のためには、そのように親自身が揺れる姿を決して見せないように心がけ、「ここで根を張っていくことを大前提」に生活を築いていきたいと自分に言い聞かすように語る。子どもの育ちを中心において「家族の物語」を語り直すことにより、帰国後に生じた存在論的不安を軽減させ、第二の「ホーム」を形成すべく努力する姿がそこにはあった。

#### 【事例⑭】(36歳・男性)

高校卒業後に体育教師になりたくて大学進学を目指していたが、給料が安いからというので父親の大反対にあった。ちょうどその頃、先行してデカセギに出ていた仲間の稼ぎ話に魅力を感じていたところでもあったので、渡日を決意する。1991年に初めて日本の地を踏んで以降、2009年に帰国するまでの18年間は移動と転職の連続であった。日伯の往復を5回ほど繰り返し、日本国内ですくなくとも7回の転職経験をもつ。居住地も、神奈川、東京、群馬、静岡、愛知、岐阜、石川と、いくつもの土地を転々としており、2度目の渡日時の居住先となる群馬では、親しくしていた女性との間に子どもが生まれ、結婚した。3度目の渡日以降は、妻子はブラジル在住のまま、単身での往復を繰り返すことになる。

さまざまな土地を転々とすることは、同胞が集住する地域の利点と欠点に気づくことでもあった。群馬、静岡、愛知など、同胞集住地域での生活の便利さを彼は次のように振り返る。

ブラジル人集中しとるとこは、やっぱり便利だね。なかなか日本人と接触しない、しなかったね、俺の場合。やっぱり同じ言葉しゃべれる人のほうが楽だから、ほとんど知り合いはブラジル人だった。

他方、同胞の集中は職を獲得するための競争が激しくなることを意味するため、不安も大きくなるという。

ブラジル人が集中しとるところ、みんな小牧行きたい、群馬行きたいとか。で、人が多くて首になりやすいっていうか。群馬もそうだった。こわいね、やっぱ。

対照的だったのが石川での生活である。最初に石川で暮らしたのは3度目の渡日時であった。相対的に同胞が少ない石川では、日本人との接触も生まれ、日本語の習得や日本人の生活に触れることも可能になったという。

職場ではやっぱり、ブラジル人が少ないから、なんとか日本語をしゃべらないと難しいよね。通訳さんがおるけど、工場でっかいだったね。なんか問題があって、通訳さんが呼んで、人来るまでにはなんとかしゃべらないとちょっとでもしゃべらないとね。で、工場内でも外でも、やっぱり日本人と接触が多いから、少しでも日本語をしゃべれるようになって、生活しやすくなったね。そこから、やっぱり日本のことどんどん、知ってしまったね、いろいろね。食べ物とか、日

本人、夜何しとるとか。スナック行ったり、クラブ行ったり。【それは知り合った日本人と一緒に  
行ったりしたんですか?】そうそう。はじめて本当に日本人の友達できたのは、やっぱり石川県  
に行ってから。

彼にとって石川は、滞日中に暮らしたなかで「一番よかった」と思える場所であり、5度目の渡日  
以降、2009年に帰国するまでの6年間を石川で過ごしている。その反面、同胞集住地域に対して彼  
は、雇用をめぐる不安のみならず、たとえば4度目の渡日時に暮らした小牧市について「俺嫌いよ、  
ああいうブラジル人いるところは」と述べるように、同胞が集住していることそのものへの嫌悪感を  
抱くようになった。

そして2008年のリーマン・ショック以降の不景気によって残業は激減し、平日でも自宅待機の指  
示が出るようになってきたため帰国を決意し、2009年1月にブラジルへ戻って来た（妻とは日伯を  
往復している間に離婚・復縁を繰り返し、インタビューの3ヶ月ほど前に公式に離婚が決定してい  
る）。

帰国後は、職を得ようといろいろな会社に履歴書を送ったが、面接に呼ばれることもほとんどな  
いという。「日本でした経験はブラジルでは関係ないって言われたことがある」と述べる通り、滞日  
期間が長く、ブラジルでの履歴がほぼ空白になってしまうことが、帰国後の就職機会を大きく阻ん  
でいる。

だが、帰国後の仕事生活をめぐる困難はそのような書類上の問題だけではない。より深刻なのは、  
長い滞日期間および日本人との深い接触を通して身に付いた〈日本のやり方〉が、彼自身のなかで  
〈ブラジルのやり方〉と激しく衝突を起こすことにより、職場への適応が困難をもたらしていること  
である。実際、彼は帰国後、知人を通じて、親や友人が「マリリアでも一番いいとこだ」と太鼓判  
を押すほどのブラジルでも大手の製菓会社の工場に職を得ることができたにもかかわらず、5日ほ  
どでそこを退社して周囲を驚かせた。退社の理由について述べる以下の語りは、工場での従業員の  
働き方が日本とブラジルの違いとしてどのように彼の目に映ったかを示している。

【どうしてやめるの?】メチャクチャだから。ひどい。【工場で?】工場。だってほら、入る前  
に5日間ぐらい勉強するね、いろいろ。トヨタシステムとか。俺、ずっと18年間日本で覚えてき  
たことなんやけど、実際はほんとにメチャクチャでした。まあ、それだけだったかなあ、オレは  
暴れたもん、職場で。まあ、そういう工場で働くことってというのは、日本とブラジルまったく違  
うもんって思った。日本はきちんとしとる。きれいね、工場って。もうちゃんとルール決まっと  
る、みんなちゃんと姿勢がいいね。ブラジル違う。なんかすごいショックでしたよ。

この件に関わらず、再適応の困難は日常生活のさまざまな場面で生じ、彼は「変なブラジル人」  
として位置づけられ、また、自らもそのような存在として自己を位置づけていくことになる。たと  
えば友人と遊んでいても自分にだけ冗談が通じないことに疎外感を抱かざるを得ない。

ブラジルに来て、「変なブラジル人」がいる。仲間たちとみんな酒飲みにいったら、話あんまり  
合わない。あの人ら言っとる冗談とか、俺わからん。みんな笑っとる間に、俺、馬鹿な顔しと  
る。結構あるよ。

あるいは、週末にアルバイトで働いているカラオケ・バーにおいても、ウェイターとしての対応の仕方があまりにも丁寧であることから、客から違和感を表明されることもあるという。

よく日本では「ありがとう」という挨拶が多いよね。必要なものだと思う。ここ、そんなにすごい親切に挨拶したら、「あんた、ゲイじゃない?」とかって言われる。言われたときもあったよ。

このように、長期にわたる日本滞在で身に付けた〈日本のやり方〉が、ブラジルという別の場においては異なった意味を付与されることになり再適応を困難にしていることも、帰国後のキャリア形成を難しくしていると考えられる。

だが一方で、日本という場が真に彼を受け入れてくれるか否かについても、彼は疑いをもたざるを得ない。非日系の父親をもち、外見上いわゆる「日本人」とは異なる風貌をもつ彼は、いくら日本という場にふさわしいやり方を身に付けたとしても、最後のところでは十全たる市民として受け入れられないことへの不安を拭い去ることはできないでいる。そしてそれは、日本での具体的な被差別経験によるところが大きい。

向こう（日本）に行っても、日本語を一所懸命勉強して、本当にべらべらになっても、「外人」ね、ずっと。差別はあんまりないよ。でも、あるときは、すごい悲しいよ、本当に。1991、2年ぐらい、あの頃は結構あった。床屋さんに行って髪切ってもらうのに、こうやって（指で×を作る）。【だめって言われて】はい。田舎だったけどね。でも、すごいそれ、傷深いよ。忘れられない、そんな。

じつは彼には、帰国前から親しくしている石川県在住の日本人女性がおり、帰国後、3週間ほどブラジルの彼のもとへ遊びにきたこともあるという。将来的には結婚ということも考えないではないが、彼女自身の親の介護のことを考えると結婚生活をブラジルで送ることは考えられない。しかし、日本で疎外感を感じ続ける自分の姿を想像すると、日本でも生活も不安が先に立ち、結婚に踏み出せないでいる。

日本でずっと暮らすことを考えると、自分がずっと「外人」になるって思ってしまうときがある。すごく、悲しいね。だから、ずっと暮らせるかどうかかわかんない。そういうプレッシャーが大きかったらたぶん、途中で……。だから、彼女のこと、すごい好きなんやけど、結婚するのはこわいんだよ。国際結婚が。

彼は、「俺、人生は半分ブラジル、半分日本」だから「すごい複雑、頭ん中」と自らの位置づけをめぐる苦悩について語る。また、それゆえに、「これからどうするかわからない」と将来の方向を見出せないことへの不安を語ってもいる。日本とブラジル、いずれの社会への参入にも困難を感じるなかで人生経路を展望することは、彼にとって容易なことではない。

### (3) 存在の再定義による仕切り直し—読み直される人生経路

前項では、日本での経験がアイデンティティの揺らぎをもたらし、帰国後のブラジル社会への再

参入を困難にするケースを検討したが、アイデンティティへの問い自体がデカセギの主要な動機となっていたケースも存在した。具体的には、日本に関わる文化的資源の欠如を埋め合わせることを期待して渡日を選択されたわけであるが、文化的な「真正性」への期待はデカセギの「現実」との間に大きな齟齬を生みだしかねない。ただし、そのような齟齬の経験は、アイデンティティに関わる自らの問いそのものを問い直し、自分固有の人生経路を新たに築いていく契機となりうるものでもある。

#### 【事例⑨】(23歳・男性)

自らの「ルーツ」に対する確かな手応えを獲得することを目的に渡日を決意したのだが、渡日後の生活はアイデンティティに関する彼の問いにかならずしも納得のゆく答えを与えてくれるものではなかった。渡日後、彼は豊橋市でデカセギ生活を送っていた兄のもとに身を寄せ、「来た以上は働かないとだめだよ。ぶらぶらしていてもしょうがないから」という兄の言葉に従って、派遣会社を通じて仕事を探し、自動車部品工場で働きはじめた。「1日中働いて、帰ってからは兄と少し話して、寝る」という生活を通して彼が経験することになったのは、仕事中心で「個人主義的なところがすごく多い」日本社会の現実であり、祖父母から伝え聞いていた家族生活を重視するというイメージからはかけ離れたものであった。「ルーツ」として想定された日本に実際に身を置いてみても、「全然期待していた答えが返ってこなかった」のである。

まず向こう（日本）の人間は仕事のことしか考えない。家族の生活は基本的にはない。自分のルーツを探るという意味でも、もともといまの日本人というのは、うちの祖父母が守ってきたものというのは一切ない。というのがあったので、まったく自分の目的は達成できませんでした。【おじいさんやおばあさんが守ってきたものというのは、どういうものだと理解していますか？】日本という国は、雪があり、田圃もたくさんあり、家族生活をすごく大切にしている、というのは聞いていたんですけど、その家族生活というものがなかった。(中略)自分が描いていた日本人、日本の家族というのはもう少し、お互い協力しあうような、そういう人びとだと思っていたのが、そうではなかった。でもそれは仕方がないし、それを受け入れるしかなかったんですね。

ここで重要なのは、日本にあるはずの家族生活が実際にはなかったということであるよりは、むしろ日本での生活を通じて、家族生活を大切にしている〈わたし〉ないし〈わたしたち〉が新たに析出されていることである。そして、「なんだかんだ文句を言いながらも、ブラジル人の間ではまだやっぱり家族としての団結力みたいなものがあるような気がします」と語られるように、家族生活の重視は〈ブラジル人〉を特徴づけるものとして再認識され、〈わたし〉は〈ブラジル人〉と渡日前とは違ったかたちで接合されることになるのである。

〈わたし〉と〈ブラジル人〉との新たな接合は、大学に行くことの意味を見出しかねていた彼に、自らの進路に対する見通しを与えることになった。彼は、帰国した今となっては「大学へ行けばちゃんとした可能性がどんどん広がっていくということがわかる」と言い、そのような可能性の拡大は「日本で実現しようとしてもむずかしいことだ」として次のように続ける。

日本という国は日本人のためにあるから、それと同じようにブラジルはブラジル人のためにあるわけだから、ぼくはそのチャンスを無駄にはしたくないですね。

渡日前、自らの存在に対する手応えを感じとることのできなかつたブラジル社会を、彼はいまや自分固有の人生経路を築いていくためのかけがえのない場として認識し、そこに自らを位置づけ直しているのである。

「ルーツ」として想定された日本が期待はずれだったことの帰結として、重要なことがもうひとつある。それは、「ルーツ」への疑問に納得のゆくかたちで答えてくれず、そのことに関して不満を抱いていた両親に対して、彼のなかで新たな理解が生まれたことである。彼はまず、日系2世として生きてきた両親の葛藤に思いを馳せる。

ただ、両親はなんとなく、あまり教えなくなかったような気がします。というのも、ブラジル人として生きてほしいなという、そういう気持ちを感じていましたね。

そのうえで、自らが日本で経験した現実を重ね合わせながら、息子から発せられる「ルーツ」への問いに対する両親の複雑な心境を、共感をもって理解しようとするのである。

いままで両親がぼくの質問に対して答えられなかったのは、答えられなかったという面もあるかもしれないけれども、じつは答えなくなかったと言ったほうが正確なのかなと思います。

「ルーツ」探求の旅は期待はずれに終わった。しかし、このデカセギの経験が、彼にとって、自分に固有の人生経路を両親に固有の人生経路と関連づけながら模索していくための契機となったとは言えるだろう。両親に固有の人生経路を自分なりに受け継ぎながら、自らに固有の人生経路をどのように築いていくか。「継承」をめぐる問い方そのものが、彼のなかで変化したのである。

#### IV. 結語

本稿では、日系ブラジル人青年の移行過程において日本へのデカセギがもつ意味について、14名の帰国者への聴き取り調査をもとに考察した。以下では、最初に提起した3つの問いに答えるかたちで、得られた知見をまとめておこう。

まず、「日系ブラジル人青年が日本へデカセギに向かう動機はどのようなものか」というのが第1の問いであった。学費稼ぎをはじめとする経済的理由を渡日の理由に挙げる者がほとんどだったが、それだけでデカセギに向かう理由のすべてを説明できるというわけでもない。とりわけ、在学中ないし在職中の者で現状に対する居心地の悪さを感じている者にとっては、デカセギは、そのような現状から「脱出」し「解放」されるための絶好の機会として期待された。

他方、経済的動機以上にむしろ文化的動機からデカセギに期待を寄せる者もいた。すなわち、「日本文化」に接近するための手段としてデカセギが選択されているのである。ただし、「接近」の意味合いは、家庭や地域で継承されてきた文化的資源（日本語や日本文化）の所有状況によって異なりを見せる。文化資本を豊富に継承していることがさらなる資源の獲得（具体的には、日本語の習得やサブカルチャー趣味の満喫など）へと向かわせる場合もあれば、文化的資源を十分に継承されていないことへの不満（もしくは「ルーツ」への不安）から渡日へ駆り立てられる場合もあった。いずれにせよ、経済的動機のみでは説明できない文化的要因（消費文化やアイデンティティなど）とのかかわりからデカセギ現象を理解していくことの必要性を示唆していると言えるだろう。

第2の問いは、「日本へのデカセギは日系ブラジル人青年に対してどのような意味世界との接触

をもたらすのか」というものである。対象者たちはそれぞれの期待を胸に日本に降り立つわけであるが、斡旋業者を介しての渡日、居住、就労という構造的な理由から、かれらを待ち受けるのは、多くの場合、ブラジル人集住地域での生活である。そこでは、異文化・異言語環境に参入するストレスが大幅に軽減されるため、効率的に資金を稼ぐことへの集中が可能になる。その一方で、日本社会との接点は消費という窓口にはほぼ限定されるため、消費者として経験する便利さや快適さが日本社会の印象として語られる傾向が見られた。文化的要因のうち消費文化の享受がデカセギの主要な動機になっている場合でも、生活の構造は基本的に同じと言えるだろう。また、長期にわたって日本での生活を続けるなかで、家族を形成したり豊かな友人関係を築いたりした結果、日本社会との接点は限定的なものでありながらも自らが生活した場所を「ホーム」と感じるような事例もあった。

だが他方、デカセギに託された「解放」ないし「日本文化」への接近という期待が、ブラジル人集住地域での生活というデカセギの「現実」のなかで葛藤へと変化し、そうした葛藤含みの状況に対して交渉や妥協を迫られる場合もある。日本社会との接触が限定的であるがゆえに期待していた日本語習得の機会に恵まれないとき、同胞に囲まれた環境の外に日本語を学べる場を求めることは1つのやり方だろう。だが、そのようにして高い日本語能力を獲得した者は、通訳ないし翻訳という役割を担わされることによって、職場での過重負担や地域において同胞との間で生じる軋轢に悩むことにもなりやすい。その結果、「解放」どころかより窮屈な生活を余儀なくされることもあり得る。「解放」や「日本文化」への接近に対する期待は、渡日後の生活のなかで、同胞社会との思わぬかたちでの接触として経験されることになるのである。

第3の問いは、「日系ブラジル人青年は、日本へのデカセギによって経験する複数の意味世界との接触を通じて自らの行為や過去をどのように意味づけし直し、自分固有の人生経路を築いていこうとするのか」というものであった。資金稼ぎにはほぼ限定された目標をもって渡日を選択されている場合、先述した通り日本社会との接触は限定的なままで仕事に専念できる環境のもとで目標を達成して帰国した後は、渡日前の地点から再出発することにそれほど大きな迷いや葛藤はないようである（順接的人生経路）。また、諸事情により不本意な帰国を余儀なくされた場合でも、利用可能な資源の支えがある場合にはブラジル社会への再参入が比較的容易である（接合的人生経路）。

しかし他方、ブラジル人集住地域での生活が効率的な資金稼ぎのための手段という意味合いにとどまらず、そこでの生活自体が自らの存在確認の場として重要な意味をもつようになった場合、あるいは、ブラジル人非集住地域での生活が長く日本社会への参入の度合いが高かった場合などは、帰国後、存在論的不安に悩まされる傾向があり、ブラジル社会への再参入に困難を感じる状況が生じやすい。そうかといって、日本社会に本格的に参入することも現実にはむずかしいと感じられているため、「子どもの教育のため」といった拠り所とすべき規準がない限り、人生経路を描くことは容易ではない（揺らぐ人生経路）。

文化的要因のうちアイデンティティ（「ルーツ」の確認）がデカセギの主要な動機である場合、期待と「現実」の齟齬はいっそう大きなものとして経験される。繰り返し述べてきたように、デカセギの「現実」は多くの場合、ブラジル人集住地域において経験されるものであり、本稿で取り上げた【事例⑨】の場合も例外ではなかった。ブラジル人集住地域は、日本社会への参入を極力限定的なものにとどめ、仕事中心に生活を組織化するためのさまざまな装置が配備された環境といえる。そのような環境の内側で過ごす【事例⑨】に見える「日本（人）」は、仕事一辺倒で家庭生活を顧みない、彼が確認したかった「ルーツ」とはかけ離れた存在であったとしても不思議ではない。その



意味で、「ルーツ」への失望は、日本社会への参入の結果というよりも、構造的に強いられたものとしての日本社会への非参入の結果と言ったほうがよいであろう。だが重要なのは、このデカセギ経験を経て【事例⑨】がブラジル社会に自らを位置づけ直していることである。渡日前、自らの存在に対する手応えを感じとることのできなかつたブラジル社会は、いまや自分固有の人生経路を築いていくためのかけがえのない場として認識されるようになった。同時にそれは、両親に固有の人生経路への共感的理解をとまなうものでもあったのである（読み直される人生経路）。

以上の知見が示唆するのは、第一に、日系ブラジル人青年のデカセギ経験は経済的動機のみで説明することは困難であり、消費文化やアイデンティティといった文化的要因をも組み込んだかたちで論じられる必要があるということである。国境を越える移動と若者の移行過程に関する新たな理論枠組みの構築が求められていると言えるだろう。そして第2に、デカセギによってかれらが経験する「現実」は、かれらが居住、就労する地域の特性との関連で説明される必要があるということである。ブラジル人集住地域と非集住地域とでは生活の組織のされ方が異なるであろうし、集住地域のなかにも多様な形態があると予想される。これらの相違とそのことが日系ブラジル人青年のデカセギ経験に及ぼす影響について、さらに丁寧に解明していく必要があるだろう。

## <引用・参考文献>

- 池野寿美子 2010、『ブラジル人学校の子どもたち―「日本かブラジルか」を超えて―』ナカニシヤ出版。
- 樋口直人 2005,『共生から統合へ―権利保障と移民コミュニティの相互強化に向けて―』梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005,『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク―』名古屋大学出版会,pp.285-305。
- 池上重弘 2001,『ブラジル人と国際化する地域社会―居住・教育・医療―』明石書店。
- 乾彰夫 2009,『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち―個人化・アイデンティティ・コミュニティ―』青木書店。
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005,『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク―』名古屋大学出版会。
- 児島明 2006,『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー―』勁草書房。
- 森田京子 2007,『子どもたちのアイデンティティ―ポリテックス―ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー―』新曜社。
- 大久保武 2005,『日系人の労働市場とエスニシティ―地方工業都市に就労する日系ブラジル人―』御茶の水書房。
- 小内透編 2009a,『講座 トランスナショナルな移動と定住 第1巻―定住化する在日ブラジル人と地域社会 在日ブラジル人の労働と生活―』御茶の水書房。
- 小内透編 2009b,『講座 トランスナショナルな移動と定住 第2巻―定住化する在日ブラジル人と地域社会 在日ブラジル人の教育と保育の変容―』御茶の水書房。
- 小内透編 2009c,『講座 トランスナショナルな移動と定住 第3巻―定住化する在日ブラジル人と地域社会 ブラジルにおけるデカセギの影響―』御茶の水書房。
- 小内透・酒井恵真編 2001,『日系ブラジル人の定住化と地域社会―群馬県太田・大泉地区を事例として―』御茶の水書房。
- 関口知子 2003,『在日日系ブラジル人の子どもたち―異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成―』明石書店。
- 丹野清人 2007,『越境する雇用システムと外国人労働者』東京大学出版会。

付記 本研究は、平成20・21年度科学研究費助成を受けた研究成果の一部である。

## 調査対象者の概要

ID	年齢	性別	日系	移動歴	教育歴	職歴(親職歴)
①	21	女	3世	ヒノボリス→(2006)豊田→(2008.11)ヒノボリス	ブラジル高校卒業(渡日)→ブラジル予備校	豊田では検査(欠陥、母と同じ職場)。(父母)ブラジルでは農業。
②	24	女	4世	バストス→(2006、20歳)愛川(2年11ヶ月)→(2008)バストス	ブラジル公立高校(TSUYA、95%日本人)→大学(3回生終了後休学して日本へ。帰国後再び3回生から始め、現在4回生)(帰国後幼少期に3年間通っていた日本語学校に再び)	日本では富士通(機械操作)、村田製作所(少し大きめの機械操作)。(父母)ブラジルでは養鶏場。しかし不景気で倒産。(父)富士通で仕事。帰国に移転。
③	24	男	3世	ヒノボリス→(2000、15歳)宇都宮→(2003)ヒノボリス→(2006)豊田→(2008.11)ヒノボリス	ブラジル学校初等教育課程終了(渡日)→帰国後、ブラジル高校卒業。	宇都宮では自動車エンジンの配線(欠陥)。豊田では溶接・スポット。帰国後は、IT関係の研修を受けながら父の農業の手伝い。(父母)ブラジルでは農業。帰国後は再び農業。
④	31	男	3世	トクッパン→(1997、19歳)愛宕(2001)→トクッパン→(2005、26歳)福井(妹、2週間)、愛知(いとこ、2日)、埼玉(いとこ、2年9ヶ月)(2008.11)→トクッパン	ブラジル公立高校卒業(大学受験に失敗し渡日)→ブラジル私立大学(経営学、3回生で休学して渡日。帰国後卒業)	最初の4年間で8、9回転職。日本語能力あるため面接でも有利。スズキ自動車(1週間)、積産(長年)。2度目の渡日時はプラスチック関係。凸版印刷で外職検査(リーダー)。2度目の帰国後はGSでインターンシップの後、バストスの養鶏関係の会社でインターンシップ。そして正式採用。(父)ブラジルでは小さなサッシ会社を経営。(母)専業主婦。
⑤	29	男	3世	トクッパン→(1997、17歳)群馬(2日間)→浜松→(2009.8)トクッパン	ブラジル高校(高2まで)→帰国後、スプレクターボで中等教育課程終了資格取得。	自動車部品(牧場、8年間)、タイヤの滑り止めのチェーン、ヤマハの部品、自動車部品(最初と同じ)。(父)ホンダ部品、プレス、自動車部品(最初と同じ)。帰国後は、自動車とバイクの免許を取り、父の自動車整備の仕事を手伝っている。
⑥	24	男	3世	トクッパン→(2004、19歳)重松→(2006)トクッパン(45日間)→浜松→(2008)トクッパン	ブラジル私立大学(法学部、3回生の途中で休学して渡日)→日本で活動しながら公文に通って日本語学習(週2で20時)→2年で帰国する予定が4年になり、休学は無効に。	スズキの潤滑工場(ブラジル人多)、自動車部品工場(父も働くユニバーズ、ブラジル人1人)。帰国後にある施設でサラリーマンとして働き、現在は父の手伝い。(父)ブラジルでは整備士。(母)ブラジルでは除の先生。(父)帰国後は再び整備士。
⑦	27	男	2世	マリリア→(2000)本庄見玉、御殿場(9ヶ月)(計2年半)→マリリア→(2006)鹿沼(1、2年)、藤沢(1ヶ月、姉がいた)、埼玉→(2009.6)マリリア(※1997年に1997年12月間、相模原の練習で日本へ)	ブラジル私立高校卒業(渡日)→ブラジル私立大学(リハビリテーション、3回生までやって再び渡日。資格得た)→帰国後、ブラジル公立大学(体育)と私立大学(食料)の2つに通う。	本庄見玉では携帯電話(DMC、全員クビ)、御殿場では自動車部品(ドクターキップ、9ヶ月)。再来日後、鹿沼でシステムキッチン(15、6時間勤務の母も)、小山で昭和電工(自動車部品)、義生で仕事。帰国前の埼玉では水戸建設(重車レンタル)。(父)ブラジルでは、農業の後、柔道の先生とマッサージ。(母)数年前から日本語教師(以前はマリリアのモデル校、現在は自宅)。
⑧	33	女	3世	トクッパン→(2005、28歳)武生→(2009.10)トクッパン	ブラジル高校→ブラジル私立大学(法学部)(日本語の基礎は日本語学校で)	ブラジルでは、高卒後からカタヤマ運輸ほかで事務(大卒まで)。日本では村田製作所。(父)ブラジルではアグロニックが作る製品(豆乳など)の販売(サンパクロで、すでに定年退職)。(母)裁縫。
⑨	23	男	3世	バストス→(2007、21歳)豊橋→(2009.7)バストス	ブラジル公立高校→私立大学(2回生の途中で休学して日本へ。帰国後は2010.2より3回生から再び始める予定)	兄が登録していた派遣会社を通じて、自動車座席(3ヶ月)、自動車部品(10、11ヶ月)。(父母)ブラジルでは養蚕、果物畑。
⑩	19	女	3世	サンパウロ→(2007.12、17歳)千葉(1年1ヶ月)→(2009前期)トクッパン	ブラジル公立高校卒業→ブラジル予備校→(大学受験)	日本では食べ物の分別、レンズ関係、弁当屋。(父)日本で建築関係の仕事。
⑪	25	女	3世	マリリア→(2000、16歳)半田→(2003)マリリア→(2006)半田→(2008)マリリア	ブラジル公立高校(高1までで渡日)→帰国後にブラジル私立高校編入→ブラジル私立大学(法学部、1回生途中で休学して渡日。期限切れのため帰国後、再度受験して合格。現在3回生)	自動車部品。(父母)ブラジルでは時計店。日本では娘と同じ自動車部品(父は9年間、母は7年間)。
⑫	27	男	2世	トクッパン→(2005、24歳)福井(3年間)、岡崎(1年2ヶ月)→(2009.10)トクッパン	ブラジル高校卒業→ブラジル公立大学(建築、3回生終了で渡日。大学は日本で続けるつもりで)	ブラジルでは、大学在学中から親の会社で働く。福井では村田製作所で測定(パソコンで機械の設定や検査など。日本語ができるということで渡日前から浸まっていた)。岡崎ではデンソーで部品の検査。(父母)建築材料の会社経営。
⑬	28	男	2世	トクッパン→(2005、24歳)武生→(2009.11前期)トクッパン	ブラジル高校卒業→ブラジル私立大学卒業(経営学、21歳)	大学在学中から渡日までの親の会社で働く。武生では村田製作所。(父母)建築材料の会社経営。
⑭	36	男	3世	マリリア→(1991、18歳)藤沢(6ヶ月)、小金井(6ヶ月)→マリリア(6ヶ月)→新田、大泉(3年半)、富士(2年半)→マリリア(10ヶ月)→小松(6ヶ月)→マリリア→小牧(6ヶ月、クビ)、美濃加茂(廃業少)、小松(3年)→マリリア→小松(6年)→(2009.1)マリリア	ブラジル高校卒業	藤沢では、いすゞ。小金井では東京ガスで穴掘り。大泉では自動車部品。富士では富士フィルムロジスティクスで梱包。ブラジル帰国して香木店を開く(経営なんて単身デカセキ)。小松では村田製作所。小牧では3K3K(日本ガイシ)で電子部品。美濃加茂ではソーニー。2度目、3度目の小松は再び村田製作所で電子部品。最終帰国後は、コネに入ったネスレの工場で働くが、ブラジルの工場の在り方に耐えられず5日でやめる。現在はカラオケバーでウェイトターのバイト(金・土・日)。(父)ブラジルで産屋。

(2011年6月13日受付, 2011年6月21日受理)